

洪水の住家性鼠類に及ぼした影響

平岩, 馨邦
九州大学農学部

三宅, 貞祥
九州大学農学部

南, 学
九州大学農学部

内田, 照章
九州大学農学部

他

<https://doi.org/10.15017/21319>

出版情報：九州大学農学部学藝雑誌. 14 (3), pp.455-459, 1954-03. 九州大学農学部
バージョン：
権利関係：



洪水の住家性鼠類に及ぼした影響*

平岩馨邦・三宅貞祥・南 学
内田照章・澄川精吾・吉田博一

Effects of the flood on the habitation of domestic rats

Yoshi Kuni Hiraiwa, Sadayoshi Miyake,
Satoru Minami, Teruaki Uchida,
Seigo Sumikawa and
Hiroichi Yoshida

緒 言

昭和28年6月25日より数日間降り続いた豪雨の為、北九州特に福岡・熊本両県下に於ける遠賀川・筑後川・矢部川・菊池川・白川の諸河川は氾濫し、その流域地方は未曾有の大洪水に襲われ各方面に甚大な災害を蒙つた。

その直後九州大学に於いてはその災害の総合調査を企画し、学内の関係諸教室は夫々の専門分野の調査研究に従つた。われわれは動物に関係する部門を分担し、8月の初旬及び中旬に福岡県下の主として遠賀川・筑後川の流域に於ける水害現場に赴いて調査を行つたが、その内洪水の住家性鼠類に及ぼした影響に関するものをここに報告する。

今回の調査に際し乗用トラックの提供その他種々の便宜を与えられた西田農学部長・渡辺農学部事務長に深く感謝し、又調査に同行し助力された福岡女子大学生松下愛子・飯田和子・田島幸子の諸嬢に謝意を表する。

調査の対象及び方法

普通人家内又はその附近に棲息するネズミを住家性鼠類と云い、都会及び農村を通じわが国での主なものはクマネズミ *Rattus rattus* とドブネズミ *Rattus norvegicus* との二種である。クマネズミは一般に家屋内の天井裏とか押入内とかに棲み、ドブネズミは家屋附近の溝の傍や田畑に孔を穿つて棲む。農作物に大きな害を与え、伝染病の仲介をなすのはドブネズミの方が甚しい。今回の調査ではこの二種のネズミを対象とした。

普通或る地域に於ける棲息鼠の種類及び棲息状態を調査するにはその地域に数十個の捕鼠器を前夜配布し翌朝検するのであるが、一般に通常の棲息状態なれば獲られる鼠の数は、用いた捕鼠器の数の10%内外に過ぎないので、正確を期するには数夜連続して捕鼠作業を行うのである。

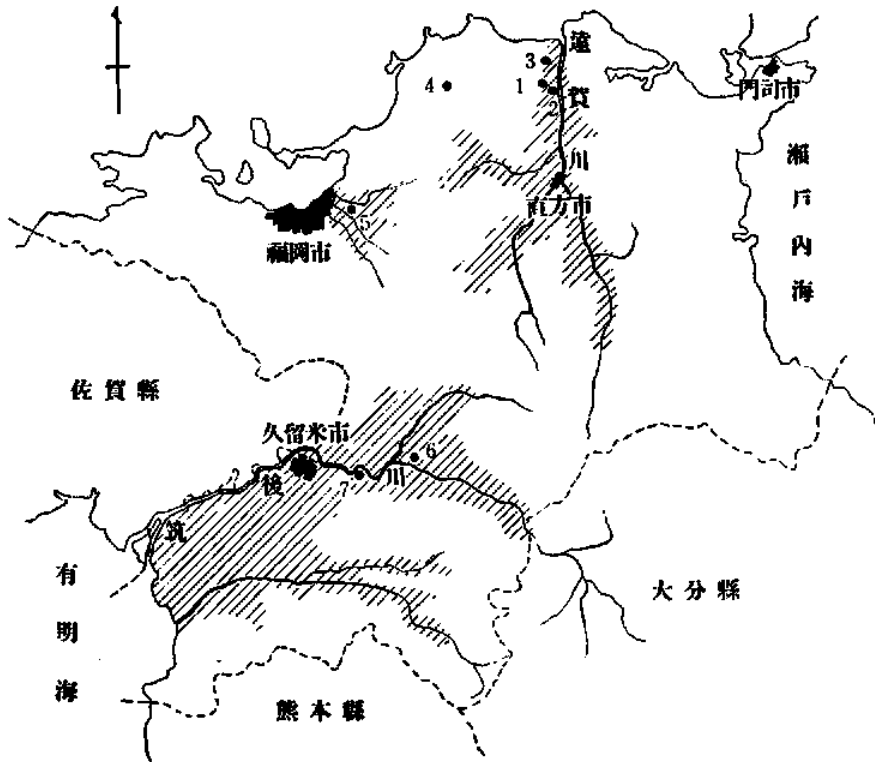
われわれの調査に於いては、捕鼠器としてはパチンコ・トラップ（撥条式捕鼠器）及び金

* 九州大学災害調査、生物研究班第1報；九州大学農学部動物学教室業績第208号、日本衛生動物学会九州支部会（昭和28年10月22日於鹿兒島）にて要旨を講演。

網製捕鼠器を用いた。前者は主として家屋の周囲・台所・納屋、後者は主として屋内に於いて用いられたが、捕鼠能率に於いて両者の間に著しい差は認められなかつた。毎回両者を半数づつ、計100個の捕鼠器を目的地域の諸農家に配布し捕鼠を依頼し翌日収納して廻つたものであるが、限られた事柄の為一地域一回のみに止まつた故、結果が不十分であることは免れなかつた。

調査の経過及び結果

われわれが調査に赴いたのは福岡県下に於ける次の諸地域である。



福岡県下水害調査地(斜線の部分は浸水地域を示す)。

1. 遠賀郡遠賀村木守部落, 2. 同老良部落, 3. 同鬼津部落, 4. 宗像郡東郷町,
5. 粕屋郡仲原村, 6. 朝倉郡蜷城村長田部落, 7. 三井郡善導寺町吉北部落。

遠賀郡遠賀村	(8月3日~4日)
宗像郡東郷町	(8月4日~5日)
粕屋郡仲原村	(8月5日~6日)
朝倉郡蜷城村	(8月18日~19日)
三井郡善導寺町	(8月19日~20日)

以下各地に於ける水害の状況と調査の結果とを合わせて記述する。

遠賀郡遠賀村は遠賀川の下流の左岸にあり、大部分は平坦な平野に位している。上流の植木附近の堤防が決潰してのち約6時間後に浸水したので、その間に村民や家畜は概ね高台に避難したため人畜の被害は皆無であつた。遠賀村で木守・老良・鬼津等の諸部落に100個の捕鼠器を略々戸数に応じて配布した。

木守部落は平野のただ中の農村で戸数約100、各戸共軒近く(5~6尺)まで浸水した。この部落ではクマネズミが2匹獲られた。

老良部落は遠賀川の堤防沿いに集合した戸数約50の農村。他方は水田に囲まれている。低い所で床上4~5尺の浸水、高い所でも若干床上に浸水があつた。ここでもクマネズミのみ2匹が獲られた。

鬼津部落は遠賀川の北端にあり戸数約80。農家は高さ40m位の丘の麓や中腹・頂上に階段状に分布している。従つて部落の浸水は丘の麓の農家に限られ、浸水度は土地の高低によつて大体床上すれすれかそれ以下であつた。ここで獲れたのはクマネズミ1匹に過ぎなかつた。尙鬼津部落の村民の語る所によれば、浸水時に多数のネズミやモグラが、或は泳ぎながら或は死体となつて部落の先端の麓にある公民館に流れつuitたとの事である。

結局遠賀村全体で獲られた5匹は全部クマネズミであつて、ドブネズミは1匹も獲られなかつた。尙餌だけとられて鼠のかからなかつた捕鼠器が若干あつた。

宗像郡東郷町は全然水害を蒙らなかつた土地であるが、比較のため調査を行つた。主力を人口稠密の中心街にそそぎ、附近の久原・平清水両部落にも若干捕鼠器を配つた。東郷町ではクマネズミ5匹のほかドブネズミ2匹が獲られ、平清水部落でクマネズミが1匹獲られた。

粕屋郡仲原村では古賀岡・河原・四軒屋等の諸部落にわたつて捕鼠器を配置したが、如何なる理由か捕鼠成績は頗る悪かつた。恐らくはこの場合、広い区域にわたりまばらに捕鼠器を散布したことによるものかと思われる。

古賀岡部落は駕与丁池附近の高台から平坦部にわたる部落で、高台にある農家には全然浸水は見られなかつたが、低い土地の農家は床上2尺位の浸水がありこの村では最も水害の大きな地域である。その高地の部からドブネズミが1匹のみ獲られた。

河原部落は仲原村役場の西方約100mの農家約15戸位からなる小さな部落で、いずれも床下乃至床上浸水であつた。ここからは1匹もとれなかつた。

四軒屋部落は飯塚に通ずる国道に沿つた平坦地で約25戸の、農家を主とする部落である。浸水は床上すれすれ程度であつた。ここでもクマネズミが1匹とれたに過ぎなかつた。

朝倉郡蟻城村は甘木町の南にあたり筑後川沿いの農村で筑後川によつて浮羽郡と境を接する。村には筑後川の支流である佐田川及び桂川が流れていて、過般の水害時の豪雨によつて筑後川の水位が高くなつたために佐田川及び桂川が氾濫し部落は浸水した。その上隣村大福村田中部落附近で6月26日午後1時頃筑後川の堤防が決潰したため約2時間後にその影響をうけて更に浸水の度を加えた。水深は所によつて異なるが8尺~1丈位で天井すれすれか、二階の上2尺位まで水が来た家もあつた。この地方は毎年川の氾濫により度々水害を受けるのであるが、今年ほどの事はあまり経験しないとの事であつた。

浸水の最も激しかつた長田と云う部落を選んで調査した。長田は桂川に沿つた戸数41の、農家を主とした部落である。水は一昼夜停滞していたと云う。

前日捕鼠器 100 個をこの部落の 29 戸に依頼してかけてもらい、翌日集めた所クマネズミ 7 匹がとれていた。又捕鼠器にかかつて逃げたのが 2 例、餌をとられた捕鼠器が 7 例もあつた。ドブネズミは 1 匹も獲られず、棲息する形跡も見られなかつた。これらの事から、相当の浸水が見られたにも拘らず、この部落には尙多数のクマネズミが健在している事がわかる。

三井郡善導寺町は久留米市郊外筑後川上流にある町である。この町の宇古北部落を選んで調査した。古北部落は筑後川堤防より数百米離れた戸数 50~60 位の、農家のみの部落であつて部落の北方の堤防は 2ヶ所にわたり決潰しそのため瞬時にして浸水したのである。これは 6 月 26 日午前 9 時頃であつてその後 4 日~5 日間浸水は続いた。浸水の最もひどい時で二階の上 2~3 尺位であつたと云う。この部落も毎年一度位は庭が冠水する位まで出水する事があるが、今度のような事は珍しいとの事である。

この古北部落でも捕鼠器 100 個をかけたが、翌日とれたのはクマネズミ 2 匹のみであつた。餌をとられた場合は 2 例であつた。

狭い地域に捕鼠器を集中したにも拘らず、捕鼠数や餌をとつて逃げた例の非常に少い事は、この調査地に於いては浸水が急激に來たことや長期間冠水していた事などにより、ネズミの数が著しく減少した事を示すもののように考えられる。

結論と考察

以上の結果を綜合して考察してみると、水害地に於いてはクマネズミは屋内の天井裏その他の高所に逃れて難を免れたが、ドブネズミは洪水の為にその棲息場所を襲われ、流されたり溺れたりするもの多く、著しく数を減じたものと思われる。前に記した、遠賀村東津部落の山麓地点に流れついた漂流鼠は恐らくは大部分ドブネズミであろうと想像される。又他方には、浸水の屢ある蜷城村・善導寺町の如き筑後川沿岸の地域には屋外に棲むドブネズミは生態的に生活し難く、平常より全く居ないか或はその数が少いと云う事も考えられるが、この点の検討は今後に残された問題である。

R é s u m é

Northern Kyushu was caught in heavy rains, rivers around overflowed and their catchment areas met unparalleled flood in the end of June, 1953.

In August we went to Onga Village, Hinashiro Village and Zendôji Town, in which the damages were most tremendous, along the Onga and Chikugo rivers in Fukuoka Prefecture, and investigated the effects of the flood on the habitations of the domestic rats, Norway rat *Rattus norvegicus*, and house rat *Rattus rattus*, in those areas.

Norway rats were captured in Tôgô Town of unflooded area and in the higher and dried part of Nakabaru Village of flooded area but in the above mentioned villages and town in which water came over several metres, only house rats were got, Norway rats being never met. Therefore it seems that in the flooded

areas the Norway rats decreased exceedingly in number, having been drifted or drowned, as the water invaded their dwelling places of ground level, though the house rats survived, escaping to the higher places in the house such as rafters of the ceiling. The peasants observed that abundant individuals of rats were drifted and arrived, being alive or dead, to the foot of the hill situated down the Onga river. Most of them are considered to be Norway rats.

Hinashiro Village and Zendôji Town along the Chikugo river are used to be flooded almost annually in summer, so the Norway rats, living in ground level, are thought to be very few in number or to be lacking absolutely, because they can not dwell habitually in such area.

Zoological Laboratory, Faculty of Agriculture,
Kyushu University